令和６年度　学校評価　自己評価書

あま市立秋竹小学校

１　総　　括

（１）教育目標（学校経営案より）

学習指導要領の基本理念をふまえ、児童のすぐれた個性を伸ばし、個を生かす教育活動通して、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図る。

＜めざす児童像＞	
○　強　く	自他の生命を大切にし、たくましく生き抜く子
○　正しく	自ら学び、正しく判断できる子
○　明るく	礼儀正しく、心豊かで思いやりの心をもった子

（２）本年度の重点努力目標

ア　確かな学力の育成に向けて

・　体験的な学習、問題解決的な学習を重視するとともに、ICT 機器の活用方法を工夫し、児童が自ら課題をもって主体的に学習を進め、他者との関わり合いにより、得た意見を基に自分の考えを含め、表現することができるよう授業の充実を図る。

・　教師が指導の改善を図るとともに、児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるような学習評価を工夫する。

イ　豊かな心の育成に向けて

・「考え、議論する道徳」に向けた道徳科の授業の充実を図る。

・　教育活動全体を通して児童の道徳性を深め、心のつながりを大切にした学級・学校づくりを図る。

ウ　健康・安全教育の充実に向けて

・　体育的行事を計画的に実施するとともに、心身の健康課題に対する指導に取り組み、家庭の協力を得ながら、児童の基本的生活習慣の育成に努める。

・　定期的な安全点検以外にも、遊具の安全な使用方法や廊下歩行の安全指導など、児童が安心して生活できる学校環境づくりに努める。また、避難訓練を随時行い、災害時に身を守るための適切な行動ができるように指導する。

エ　家庭・地域との連携

・　学校運営協議会の場や、学校 HP、学校通信等を通して、家庭や地域に本校の教育活動について積極的に発信する。

・　読み聞かせボランティア「メルポケ」と連携し、「読書の時間」の充実を図るなど、地域の人的・物的資源を積極的に活用し、教育活動のさらなる充実を図る。

２　自己評価の実施体制

（１）調査時期　令和６年１２月１２日～１２月２３日

（２）調査項目　別紙アンケート参照

（３）調査対象　有効回答者数／対象者数

・　児童　　１６１名／全１６９名

・　保護者　１２９名／全１３６名　　・教職員　１６名／１６名　計３０６名

３　考　　察【児童・保護者・教職員の総括的考察】

（１）児童の評価

・　どの質問項目に対しても、昨年度に比べ肯定的な回答が多かった。特に「学校は楽しい」「決められた仕事をきちんとしている」「自分が成長していると思う」の質問に対しては、『あてはまる』『ややあてはまる』の割合が、前年度を上回る結果となったことから、学校生活においては、概ね満足していると言える。

・　「自分からあいさつできる」の質問に対して、昨年度を下回る結果となった。普段の学校生活のさまざまな場面で、あいさつの大切さは伝えているものの、それが身に付いていない。また、「友達と仲良く生活している」という質問に対しても昨年度より下がっていることから、人とのコミュニケーションそのものに困難さや不安さなどの問題を抱えている児童は少なくないと考える。

（２）保護者の評価

・　「本年度の学校重点目標」の認知度は大幅に上昇した。各種行事の挨拶や学校通信、校舎内の掲示等で目や耳にしていただく機会を増やしたことが、このような結果につながったと考える。また、「学年通信や各種たより、ホームページ等で学校の様子が概ね分かる」という質問に対しても、『あてはまる』『ややあてはまる』の割合が、前年度を上回る結果となったことから、学校への関心や期待の表れであると考える。

・　「子どもの学習や生活について、担任や他の教職員に相談できる」という質問に対しては、『あてはまる』の割合が、昨年度を下回った。今年度、教職員の異動が多く、その異動に伴い経験が豊富な教職員や、長年本校に勤めてきた教職員の異動が要因として考えられる。しかし、どのような状況であっても保護者の方が学校に相談できる風土はなくてはならない。そのためにも、学校の風土づくりの改善や教職員の人材育成に努めていく必要がある。

（３）教職員の評価

・　どの質問項目に対しても、昨年度に比べて肯定的な回答が大幅に増加した。特に「授業を工夫し、個に応じた授業を行っている」という質問に対しては、『あてはまる』の割合が大幅に増加し、本年度の重点努力目標である“確かな学力の育成”に尽力した結果と言える。しかし、「児童は授業が分かり、基礎的な学力が身に付いている」という質問に対しては厳しい評価としており、さらに工夫や改善の必要性を感じていることがうかがえた。

４　成果と課題

≪成果≫

（１）　今年度、児童も保護者も昨年度に比べて大幅に伸びた質問項目は、学校目標の認知度であった。また教職員も「経営方針や教育活動を保護者に分かりやすく伝えている」という質問に対して、肯定的な回答の割合が昨年度よりも大幅に増加している。児童、保護者、教職員それぞれが目標を共有してきたことが、今回の児童アンケート「学校は楽しい」「自分は成長していると思う」と感じている児童の割合を高めた一助となったと考察する。今回の結果を踏まえ、目標を共有しながら、教育に当たることが大事であると改めて感じた。

（２）　「自分（わが子）は大切にされている」という質問に対しては、児童も保護者も肯定的に受け止めている割合が高い。また教職員も「児童一人一人が大切にされ、認められている」という質問に、多くの教職員が肯定的な回答であった。学級経営や児童理解のスキルアップ研修、全教職員における児童の情報共有や支援・指導検討など、さまざまな取組の成果が、この結果につながったと言える。

≪課題≫

（１）　「自分からあいさつができる」の項目における達成状況について、児童、保護者、教職員共に低い結果となっている。コミュニケーション力が必要とされる社会において、あいさつは必要不可欠である。小学生のうちに、あいさつすることが当たり前の行為であると認識させていきたい。

（２）　「困ったこと（子どもの学習や生活）について、相談できる人がいる（教職員に相談できる）」については、児童と保護者ともに肯定的な回答の割合は昨年度に比べてやや減少している。教職員の「児童や保護者の声に耳を傾けるよう心がけている」という質問に対する肯定的な回答の割合は、前年度に比べてやや高くなっており、児童と保護者との捉え方に相違が見られた。この結果を全教職員で受け止め、これまでの関係づくりを見直し、良好な関係づくりに努めていきたい。

５　改善策

（１）　家族、友達、先生、地域の方などの存在のありがたさを感じ取れる心の育成を図り、自己有用感を高めていきたい。この自己有用感が高まることで、人間関係が良好になり、その結果、人と関わることが楽しくなる。日頃の生活指導や学習の中で感謝する気持ちを高めたり、専門的な外部講師による出前授業を取り入れたりするなど、心の育成を充実させることで、あいさつも身に付きやすくなると考える。

（２）　児童や保護者にとって、より安心・安全な学校にするために、学校全体で児童を見守り、指導・支援する体制を整えていきたい。多くの教職員で児童を見守ることで、様子の変化を見落としにくくなり、児童の困り感や不安感などの早期発見につながる。児童にとっても、多くの教職員に見守られていることが安心感となり、困ったときに相談しやすくなる。児童が学校での問題を、教職員とともに解決していくことは、子どもの成長につながるとともに、保護者にとっても学校に対する安心感を与えることにもなる。今後も、児童が通いたい学校、保護者がわが子を通わせたいと思う学校を目指し、教職員一丸となって尽力していきたい。